記　録

文書番号	SCJ 第２４期０２０９１０-２４３２０２００-０２９
委員会等名	心理学・教育学委員会 社会のための心理学分科会
標題	社会のための心理学～心理学高等教育の入口と出口～
作成日	令和２年（２０２０年）９月１０日

※　本資料は、日本学術会議会則第二条に定める意思の表出ではない。掲載されたデータ等には、確認を要するものが含まれる可能性がある。

この対外報告は、日本学術会議心理学・教育学委員会社会のための心理学分科会の審議結果を取りまとめ公表するものである。

日本学術会議心理学・教育学委員会社会のための心理学分科会

委員長	中島　祥好	（連携会員）	サウンド株式会社社長
副委員長	蒲池　みゆき	（連携会員）	工学院大学情報学部教授
幹　事	河原　純一郎	（連携会員）	北海道大学文学研究院教授
幹　事	髙瀬　堅吉	（連携会員）	自治医科大学大学院医学研究科教授
	遠藤　利彦	（第一部会員）	東京大学大学院教育学研究科教授
	阿部　恒之	（連携会員）	東北大学大学院文学研究科教授
	池上　知子	（連携会員）	大阪市立大学大学院文学研究科教授
	桑野　園子	（連携会員）	大阪大学名誉教授
	仲　真紀子	（連携会員）	立命館大学総合心理学部教授・北海道大学名誉教授
	箱田　裕司	（連携会員）	京都女子大学発達教育学部教授
	長谷川寿一	（連携会員）	独立行政法人大学改革支援・学位授与機構理事
	原田　悦子	（連携会員）	筑波大学人間系心理学域教授
	村田　光二	（連携会員）	成城大学社会イノベーション学部教授

報告書及び参考資料の作成にあたり、以下の方々に御協力いただきました。

丹野　義彦	日本学術会議連携会員・公益社団法人日本心理学会常務理事
木村　和貴	CRET 教育テスト研究センター研究員・元郁文館グローバル高等学校教頭
増本　　全	株式会社リクルートキャリア就職みらい研究所所長
本園　大介	公益社団法人日本心理学会認定心理士の会会員

１．はじめに

この記録は、第 24 期心理学・教育学委員会社会のための心理学分科会において、2020 年 9 月に Web 開催の形で行われた「日本心理学会第 84 回大会」の一部としてシンポジウムを計画するに至った経緯と、シンポジウムの概略を記すものである。このシンポジウムは、日本心理学会認定心理士の会、日本学術会議心理学・教育学委員会社会のための心理学分科会、日本基礎心理学会の共同主催によるものであり、関係各位に感謝する。

２．分科会における審議の経過

2018 年４月８日第１回分科会においては、心理学の高等教育が社会の要請によりよく応えるためには、科学的な基盤の上に立つ心理学がどのようなものであり、それがどのように役立つかが、十分に社会に伝わる必要があるという問題意識を共有した。そこで、心理学に関して高校や予備校で得られる知識、期待が、大学教育に適切につながっているかどうかという「入口」の問題と、大学において心理学を学んだ卒業生が、就職活動においてどのように評価され、実社会においてどのような役割を与えられるかという「出口」の問題を、今期の中心の話題とすることにした。

2018 年８月 10 日第２回分科会は、心理教育プログラム検討分科会と合同で行われ、３名の委員が心理学高等教育の入口と出口について現状を調査した結果を報告した。心理教育プログラム検討分科会の菅原ますみ委員は、高校の指導要領における心理学に関する内容の改訂が進んでおり、大学からの関与が求められる点もあることを報告した。当分科会の遠藤委員は、大学受験生に与えられる心理学に関する情報が概ね適切ではあるが、いくつか改めるべき点のあることを報告した。当分科会の村田委員は、入口と出口とを概観し、大学のさまざまな学部と、多くの関連分野とを視野に入れてこの問題にとり組む必要のあることを論じた。

2018 年 12 月 14-24 日第３回分科会（メール審議）においては、大学において心理学を学んだ学生を社会に出してゆく「出口」について、どのような点に留意すべきであるか、分科会幹事団が就職支援企業の関係者に会い、情報や助言をいただくことを決めた。それに備えて、大学での心理学教育が何を目指しているかを大学外の方に説明するためのチラシを作成した。その第１頁を図１に示す。

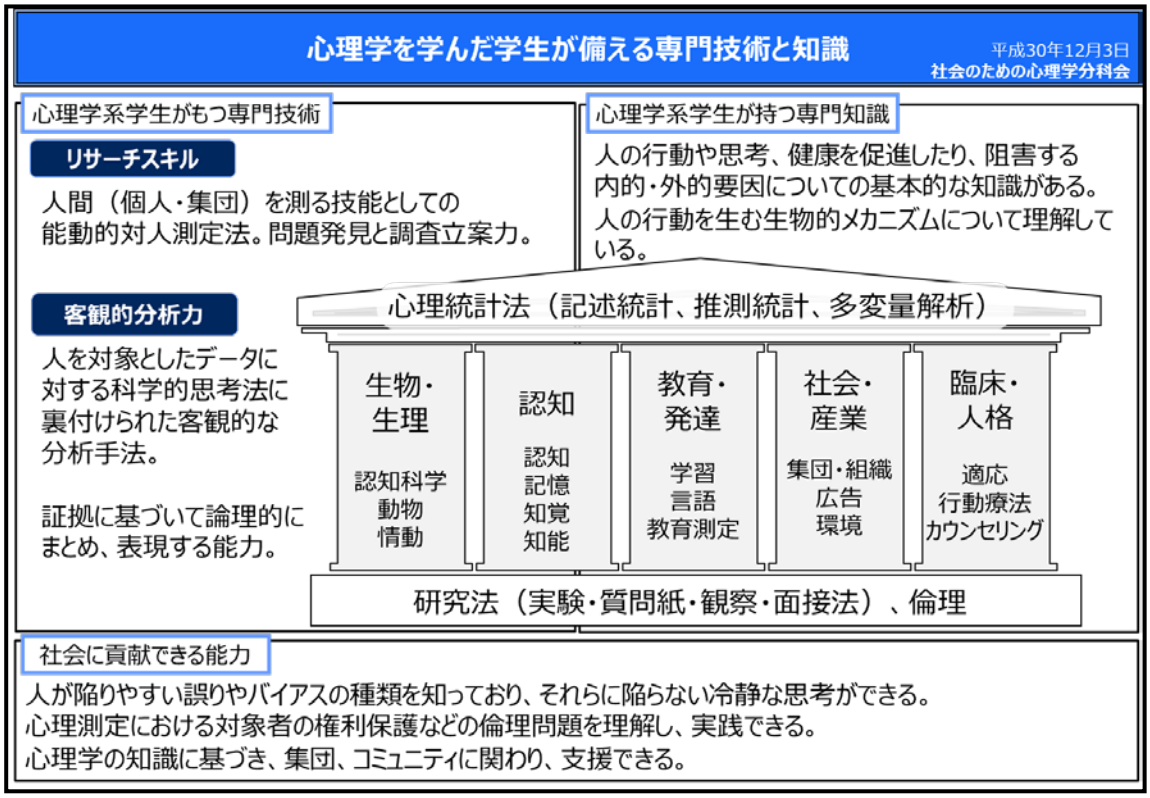

図１　心理学を学んだ学生が備える専門技術と知識

分科会幹事団は株式会社マイナビ、株式会社リクルートにおいて大学卒業生の就職に関わる担当者に会い、情報や助言をいただくとともに、心理学高等教育の現場を知っていただくことに努めた。

2019 年４月 27 日第４回分科会では、上記の活動を踏まえて、栗田卓也（株式会社マイナビ、社長室リサーチ＆マーケティング部部長）、増本全（株式会社リクルート、キャリア就職みらい研究所所長）のお二方を参考人として招き、「出口」の問題について話題提供をお願いした。それぞれの観点から、企業の人材採用の現状について紹介がなされ、大学で心理学を学んだ学生に期待するところが述べられた。このあと、分科会の委員から多くの質問があり、議論が展開された。

2019 年９月 13 日第５回分科会では、本分科会が公認心理師養成大学教員連絡協議会（公大協）に連携会議として参加することが提案され、承認された。このあと、高校生、大学受験生が、大学における心理学教育に何を期待し、その結果どのように行動するかという「入口」の問題について、高校教育、大学受験指導に関わる方から情報、助言をいただく形で調整を進めることが決まった。

2020 年２月 10-19 日第６回分科会（メール審議）においては、今期本分科会のまとめとしてシンポジウムを開催することを決定した。

2020 年４月５日第７回分科会は、新型コロナ・ウイルスの影響により、オンラインで開催された。小村俊平（ベネッセ教育総合研究所主席研究員）、木村和

貴（郁文館グローバル高等学校教頭）のお二方を参考人として招き、「入口」の問題について話題提供をお願いした。高校生、大学受験生およびその指導者は心理学に大いに興味を持っているが、時として思い描く心理学が、科学的な根拠のないものであったり、臨床関係に偏っていたりすることなどが指摘された。今期本分科会の活動の集大成として９月に「日本心理学会第 84 回大会」の一部としてシンポジウムを開催し、その記録を残すことを決定した。

３．シンポジウム「社会のための心理学～心理学高等教育の入口と出口～」概要

本来はシンポジウムに分科会委員が集まり、意見を交わすことによって今期本分科会の集大成とする予定であったが、新型コロナ・ウイルスの感染が収まらないために、シンポジウムの母体となる日本心理学会大会がネット上で開催されることとなった。そのため、事前に収録したシンポジウムの内容を分科会の委員が視聴するという形にせざるをえなかった。しかし、このシンポジウムの内容、登壇者が、これまでの審議内容に沿って選ばれていること、分科会委員がその内容を視聴したあとメール等を通じての意見交換が可能であったことから、活動の集大成としての役割はある程度果たしたと考えている。

シンポジウムの構成を以下に示す。記入してある時刻は、時間の経過を示すためのものであり、視聴は随時行うことができた。下線は本分科会幹事を示す。

13：00　企画趣旨説明
　<u>髙瀬　堅吉（自治医科大学大学院医学研究科教授）</u>
13：05　話題提供
13：05　心理学高等教育に対するイメージ～入口から～
　木村　和貴（CRET 教育テスト研究センター研究員、元郁文館グローバル高等学校教頭）
13：30　心理学高等教育に対するイメージ～出口から～
　増本　全（株式会社リクルートキャリア就職みらい研究所所長）
13：55　心理学を学んだ人材のキャリアパスー実践例
　本園　大介（公益社団法人日本心理学会認定心理士の会会員）
14：20　指定討論
14：20　心理学を学んだ人材の多様なキャリアパス
　丹野　義彦（公益社団法人日本心理学会常務理事）
14：30　基礎心理学会から～基礎心理学の学びと社会接続～
　<u>河原純一郎（北海道大学大学院文学研究院教授）</u>
14：40　総合討論
15：00　閉会

以下、内容の概略を記す。

(1)　企画趣旨説明　髙瀬　堅吉

心理学高等教育と実社会とが必ずしもうまく結びついていないことについて大学関係者は懸念を有している。そこで、高等教育の「入口」と「出口」において心理学がどのように捉えられているかを共有するために、このシンポジウムを企画した。「入口」に関しては、高校生、大学受験生が、疑似科学として普及している占いのようなものを心理学であると思いこんでいることが問題である。「出口」に関しては、最近、公認心理師法が施行されたことは一つの前進であるが、結果として心理学は臨床のための学問であるとの誤解も生じている。

社会のための心理学分科会では、心理学が科学の基盤に立つものであり、様々な領域において社会に有用な知見を提供し、有為の人材を育てるものであることを入口と出口の現場の方々に知っていただくことが重要であると考え、そのことを実践している（図１）。

大学における心理学教育の水準を保つ仕組みとして認定心理士制度があり、これに対する社会の認知度を上げてゆくことも重要である。

本シンポジウムでは、高校の進路指導、企業の採用人事などの現場に近い話題提供者の方々からお話を伺う。ここから、生徒が心理学をどのように捉えるべきであるか、大学で心理学を学んだ学生には社会においてどのような活躍の場があるのかなどの問題に進んでゆければありがたい。

(2)　心理学高等教育に対するイメージ～入口から～　木村　和貴

英語科の教員として高校生に接する中で心理学に興味を持ち、社会人としてそれを学んだ経験からお話しを進めたい。高校にいる立場からは大学で学ぶ心理学がどのように見えるかについて述べ、大学への要望も伝えたい。

わが国の大学において、この十年くらいに学部のように大きい規模で心理学教育にとり組む例が現れている。さらに公認心理師法が施行されたことが追い風になり、心理学分野への進学を目指す生徒は着実に増えている。このような生徒は、占い、読心術、癒し、自己啓発などの科学的根拠の乏しい領域から心理学に入ってくることが多く、これが大学進学後の問題をひき起こすこともある。たとえば、心理学が科学的な基盤に立つことを充分理解しないままに心理学分野に進学し、統計学を学ぶところで躓くようなことがある。一方で、高等学校の教育が探究型にシフトしつつあること、またいわゆるAO型の入試が総数を増やしたことで、資格取得、職業選択についてしっかり考えた上で心理学分野に進学する生徒も一定数存在する。この一連の動きの中で、行動系、実験系に目を向ける生徒も増えてきているように思われる。
郁文館においては、中等教育のさまざまな場面に心理学を生かしている。生

徒がいくつかのテーマに分かれて、学外の有識者や団体と協働して知識を深めてゆく「ゼミ活動」を行っており、心理学をテーマとするゼミ活動も存在する。

全国の動向を見て、あるいは郁文館における経験から見て、大学で心理学に関わる方々に、心理学がどのような分野であるかを初等・中等教育の現場にもっと伝えていただければありがたい。心理学には統計学が絶対に必要であること、心理学が人間生活の非常に多くの領域に関わるものであることなどを、伝えていただくとよいように思う。高校には心理学をきっちりと学んだ教員が多くはないので、「探究活動」を含む心理学に関わる教育について大学からの支援をいただければありがたい。また、基礎的学力に穴のある状態で大学の心理学を学ぶことになった学生にはレメディアル教育をお願いしたい。さらには、長期的な将来への希望として、心理学がアメリカのリベラルアーツ教育の中で放つ存在感が、日本のアカデミズムの中でも生まれることを切に願う。その基礎知識は心理の専門家だけでなく、全ての学生に享受されるべきものであると考える。心理学のファンとして大いに期待するところである。

(3)　心理学高等教育に対するイメージ～出口から～　増本　全

企業の新卒採用の現場に深く関わってきた立場から、心理学を学んだ学生が企業での活躍の場を見出す際の問題点、改善の可能性について述べたい。これまで社会における心理学分科会の方と話しあった経緯から、心理学が科学的な基礎の上に立つ理系に近い学問領域であることは認識している。

わが国の就職市場を特徴付けるものが、新卒採用の制度である。これは年功制、長期雇用を前提とするもので、新入社員をいろいろなことができる潜在能力を根拠として採用するものである。この制度のおかげで若者の就業率が高くなり、社員に対して長期の育成計画を立てることができ、日本社会の長所であると考えられることもあった。文系の学生を採用する場合にはこの制度が決定的であり、たとえば心理学を学んだ学生が現場のさまざまな問題に対応できるとしても、それならばこのような仕事をしてもらおうという理由で採用することは難しい。そもそも、企業の人事担当者は、現場でどのような仕事がなされ、どのような能力、経験が求められているかをよく知っているわけではない。

Society 5.0 に描かれるような速い変化の求められる時代に労働生産性を上げてゆくには、新卒採用のようなメンバーシップ型採用が限界を迎えているとの考えかたも生まれている。そして、一年を通じて何かある仕事をする人材が必要になるたびに適切な能力、経験を有する即戦力としての人材を採用するというジョブ型採用への移行が進む可能性はある。ジョブ型採用は欧米では広く行われている。今後の社会変化に加え、新型コロナ・ウイルスの

世界的な蔓延に伴いリモート・ワークが増加したことから、企業というものは社員が皆で集まって仕事をするところであるという考え方から、企業が働く個人をそれぞれ支援するという考え方に変化するという重要な局面を迎えており、採用のありかたにも影響する可能性がある。

メンバーシップ型とジョブ型とのどちらが良いというものではなく、これまでよりも多様な人材が求められるようになっているのが重要である。この点については産学間の話し合いも進んでいる。採用制度も多様になるであろう。修士、博士に関しては、文系学生についてもジョブ型採用が進み、企業がインターンシップを採用に活用する流れも出てくる可能性もある。

(4)　心理学を学んだ人材のキャリアパスー実践例　本園　大介

通信系の企業にカスタマー・サポートのエンジニアとして勤め、副業としてグラフィック・レコーディング（グラレコ）を行っている。別の副業として漫画も描いている。グラレコというのは、何でも漫画のような絵にして理解し、他人に伝える技術である。理解した内容を絵として描くことは、教育の手段としても有効である。

新宿で東日本大震災を経験し、人生は一回きりであることを強く意識した。考えるところがあり、放送大学で勉強を始め、偶然履修した科目の一つが「認知心理学」であった。これが、心理学との出会いである。

心理学を学んだことは本業に大いに役立っている。本業であるエンジニアの業務においては、自分が相手からどう見えるかということを意識するようになり、コミュニケーションの能力が増した。以前は、今のように人前で喋るなどということは考えられないことであった。改めて統計学を学んだことも収穫であった。今は、社内でキャリア・カウンセラーの業務を行うための資格を目指して勉強を続けている。

副業のグラレコでは、人を笑顔にすることを目指し、このグラレコの技術を人に教えることも行っている。ここでも、認知心理学、発達心理学の知識が役立っている。心理学とグラレコと講義の技術、心理学と漫画は、かけ算であり、相乗効果で価値を生じているように思う。漫画を描くときに色の使いかたについて考えるにも心理学が役立つ。仕事、副業、心理学の組合せで、好きなことを続けることができたように思う。

(5)　心理学を学んだ人材の多様なキャリアパス　丹野　義彦

日本学術会議等において、心理学の市民社会貢献に向けて検討を進めている。最近の大きな出来事として、高校の公民科に科学的な心理学の内容が含められることが決まり、現在準備が進められている。また、2018 年に公認心理師試験が始まった。大学においては、心理学分野が学部にまとまる方向が加速している。社会全体を見たとき、心理学が市民社会に貢献することが認

識されてきており、心理学全体が大きいものになっている。

これまでのお話にもあったように、心理学が占いやゲームではなく実証に基づく分野であること、臨床だけではない広い領域に渉ることを広く知ってもらう必要がある。公認心理師の養成においてもこのことが重視されており、基礎心理学の科学的な基盤の上に実践心理学が乗るという枠組みでカリキュラムが作られており、決して臨床に偏ったものではない。

木村先生には、高校の新しいカリキュラムにおいてどのようにすれば科学的な基盤の上に立つ心理学を教えることができるのかを伺いたい。また、増本先生には、スペシャリスト、ゼネラリストのどちらを育てるべきかという問題について、どのようにお考えかを伺いたい。スペシャリストである博士修了生は、現実に就職先を見付けるのに苦労しており、解決策があれば伺いたい。本園先生と高瀬先生に、認定心理士が社会にどのように貢献しているかを伺いたい。

木村：高校の新しいカリキュラムにおいてどのようにすれば科学的な基盤の上に立つ心理学を教えることができるのかという点について、いくら心理学的な知識や用語が教科書に鏤められたところで、現状に変化をもたらすのは難しいと考える。現場、特に首都圏以外の場所にあっては、旧態依然とした試験と評価から脱却できず、新しい教育課程においてもそれが劇的に変化することは考えづらい。記述式、作文形式の問題にする程度が限界であり、そうだとしても用語の丸暗記で突破できてしまうようなレベルになると予想される。そのような形で生徒に目論見どおりの影響を与えることは難しい。教員に心理学への深い理解と、評価への自由度、精神的余裕が必要である。

増本：現在の採用制度では、誰とどこで何をするかが判らずに採用されるゼネラリストが求められる。しかし、ビジネスの現場は高度化しておりスペシャリストの部分が求められる。スペシャリストの部分が、ゼネラリストの部分あるいはリベラルアーツによって支えられることが必要であり、どちらか一方で良いということではない。学生が学問と実践との両方を経験しておくことは重要である。

博士の学生はスペシャリストであるが、同じように、ゼネラリスト、スペシャリストの両面を持って、幅広い分野に関わっておくことが重要である。

本園：認定心理士の資格が役立つというよりも、認定心理士に至る学びの過程が重要である。心理学は社会や生活のあらゆるところに関わっており、役立つ部分は多い。

髙瀬：日本心理学会では認定心理士の方に社会の課題を解決するための研究

に参加していただく Citizen Science Project を進めており、これによって心理学と社会の結びつきが強まるものと期待している。

(6)　基礎心理学会から～基礎心理学の学びと社会接続～　河原　純一郎

心理学の基礎においては一般法則を探り、心理学が実践的に用いられる現場においては個別の問題が扱われている。これらは本来結びつかなければならないはずであるが、実際には間に越えがたい溝がある。製品開発の現場では、この溝のことを「魔の川」と呼ぶ（図２）。個別の問題を扱うには高い専門性が求められるので、学部、修士の修了生では力不足であり、博士の水準が求められる。しかし、心理学分野の博士課程修了者が企業に職を得る道筋を付けるには、最近個別の例が出てきてはいるが、今後に俟たなければならない。

基礎心理学の側にいる研究者はなかなか現場に出てゆくことができない。一つには、基礎心理学は一般法則を扱うものであるからより崇高であるという思いこみがあり、それに加えて、現場のニーズをわきまえずに自己満足的な研究をしてしまうのではないかと考えられる。この状況を改めるには、基礎心理学の側にいる学生、研究者が、会社の方から話を聞くなどして積極的に現場に出てゆくことが求められる。

加えて、大学学部における心理学教育のありかたを再検討することも求められるであろう。特に心理学概論の授業は学生にあまり響いていないと思われ、木村先生、本園先生には、このことについてどのようにお考えか伺いたい。増本先生には、企業の人事の方も知らないという企業の現場の様子を、大学の人間がどうやって知ればよいのかご教示いただきたい。

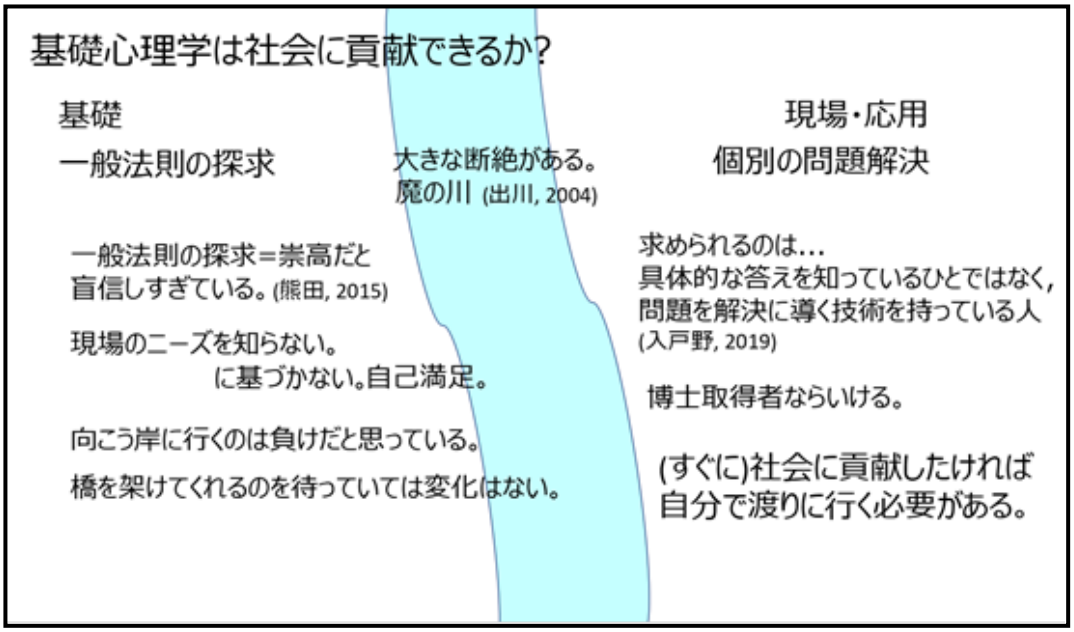

図２　魔の川

木村：自身の経験をふり返ると、英文科に在籍したときに履修したはずの心理学は全く印象に残っておらず、社会人になってから心理学分野について学んだことについては、自分の中に目標があったので、それぞれの科目が有機的につながった。学部の授業では、関連する全ての科目に有機的なつながりを付ければよいのではないか？たとえば、内容を「コミュニケーション」に集約してみるような試みがありうる。大正大学の授業を受けた経験では、僧籍の方の実践に関する話が心に残っている。

増本：企業では研究のための研究をするのではなく、イノベーションが重要である。産業界における実践の場としてインターンシップがこれまで以上に機能すれば、実際の事業の進めかたを見てもらえる。更には、そのような機会にどのような経験、スキルが必要かを学生に伝えるように、これからなってゆけばよいと思う。インターンシップのためのプログラムではなく、事業推進に寄与する実務型のインターンシップに発展させ、これを活用することで、博士課程の充実にもつながる。

本園：自分の実生活に結びつかない授業は響いてこない。「これってどこに使える」の発想で、皆で考え、楽しく学ぶのがよい。たとえば、心理統計学の話からマーケティングについて考え、お金儲けのことを考えるなどの流れである。インターンシップは重要である。企業における技術系のイベントに参加すれば、現場で何を求めているかを感ずることを含めて刺激を受けるのではないか。

４．まとめ

話題提供者のうち２名がこれまで当分科会に参考人として招かれた方であり、司会者、指定討論者は当分科会の幹事、および当分科会に関係のある他の分科会の委員長、委員であったことから、シンポジウムの趣旨を充分に踏まえた話題提供、討論がなされ、今期の本分科会を締めくくるにふさわしい内容であった。

心理学高等教育と社会の関係について考えるとき常に出てくる問題が、心理学がどのような分野であるかが入口においても出口においても充分に理解されていないということである。入口に関しては、疑似科学の領域から心理学に興味を持つ中等教育の生徒が多く、少し心理学について勉強したあとも興味が臨床に偏りがちであること、大学で心理学を学ぶにはいわゆる理系的な知識が必要であると気付かないままに大学の心理系の分野に進学してしまう場合があること、などが指摘された。出口に関しては、心理学は厳密な実証に基づく学問であることが広く知られてはおらず、公認心理師教育もそのほとんどが臨床に関わると誤解されている場合が多いこと、心理学の専門的な知識が企業等の現

場において有用であると広く認識されるには至っていないこと、などが指摘された。

しかし、これまでの地道な努力の結果により、改善のきざしが見られる。大学に学部規模の心理学教育カリキュラムが増えてきており、大学受験生の人気を集めていることは、大いに注目すべきである。間もなく、高校の教育課程に科学的な心理学に関する内容が盛りこまれてゆくことは、更なる希望を抱かせるものである。公認心理師教育において、実は実証に基づく心理学の基礎の部分が重視されていることも、これから広く社会に知られてゆくであろう。企業の新入社員採用においては、インターンシップ制が重視されてきており、この制度に学生を送りこむことによって、企業の側に心理学への理解を深めてもらうと同時に、大学側の人間が現場の要請を具体的に知ることができるはずである。

社会人として科学的基盤のしっかりとした心理学を学んだ場合、それが仕事や副業のどこに役立つかを見つけやすくなるのではないかという具体的な例が、少数ではあるが示されたので、この点について今後調べてみる価値がある。

心理学においては、心とは何かという難問を、実証的な手続きで解く訓練をするがゆえに、そこで育った学生は、メンバーシップ型採用の下でも、現場の要請に適切に応えるような人材に育つ可能性が高い。リベラルアーツは現実社会を変える力を有するということであり、その中での心理学の役割は増している。このことを、高大連携の仕組みなども活用して、社会全体に広く知ってもらうことが重要である。また、そのような活動を通じて新しいジョブ型採用の流れに乗ってゆくことも求められるであろう。入口においても出口においても、何のために心理学を学ぶのか、何のために心理学の研究をするのかということを、明確に説明し理解するような努力が欠かせない。シンポジウムにおいては全ての登壇者がコミュニケーションの重要性に触れている。さまざまな現場の要請に応えるために心理学の研究が発展した例は研究史上にも多々あることを、大学の研究者、学生も心に留めるべきであろう。

＜参考資料１＞シンポジウムポスター

JPAS-012
日本心理学会企画シンポジウム

社会のための心理学
～心理学高等教育の入口と出口～

日　時：令和２年９月１０日（木）13:00－24:00
オンライン開催（事前に収録したものを公開するもの）
定員：100名

心理学の入口と出口の
現状を見つめる

心理学を学んだ人材の
キャリアパスの多様性を示す

次　第：（Web収録日での進行予定）
13：00　企画趣旨説明
　髙瀬　堅吉（日本学術会議連携会員、自治医科大学大学院医学研究科教授）

13：05　話題提供
心理学高等教育に対するイメージ～入口から～
　木村　和貴（CRET教育テスト研究センター研究員、元郁文館グローバル高等学校教頭）

心理学高等教育に対するイメージ～出口から～
　増本　全（株式会社リクルートキャリア就職みらい研究所所長）

心理学を学んだ人材のキャリアパス－実践例
　本園　大介（公益社団法人日本心理学会認定心理士の会会員）

14：20　指定討論
心理学を学んだ人材の多様なキャリアパス
　丹野　義彦（公益社団法人日本心理学会常務理事）

基礎心理学会から～基礎心理学の学びと社会接続～
　河原純一郎（日本学術会議連携会員、北海道大学大学院文学研究院教授）

14：40　総合討論
15：00　閉会

申込先URL：https://www.jpa2020toyo.com/jpas-012-registration
問い合わせ：　yoshitaka.nakajima(a)100years.life　担当：中島祥好

企画：日本心理学会認定心理士の会／日本学術会議心理学・教育学委員会社会のための心理学分科会／日本基礎心理学会